わんちゃんロボットただ今参上

小城ゆり子

ワンちゃんロボットただ今参上

小城ゆり子

（１）

ぼく、ワンちゃんロボット。黒い子犬のロボットだよ。

アユミロボット製作社で作られ、歌やダンス、それと人間の言葉をみっちりしこまれ、店のショーウィンドーに飾られた。ペット・ショップの犬・猫みたい。自分が売り物だって、なんだか悲しいな。

ぼくがそこで遊んでいると、通りかかる人たちがみんな、ぼくにみほれる。

「かわいいね、この犬」

「でも、ほんとの犬のほうがいいな」

「かわいくダンスしているよ」

「でも、二十万円は高いな」

などと若い客たちがしゃべっている。ぼくの値段、二十万円は高いのかな？

中年の紳士がやってきた。ぼくのしぐさをにこにこしながら、じっと見ている。

「お客様どうですか？」店員さんがすすめる。

「あ、家内がね…一人息子を事故で亡くし、毎日毎日泣き暮らしているんだ。私も悲しいが、家内の悲しむ姿を見ていられなくて…家内にこのロボットを買ってやったら、少しは気がまぎれるかな」

「それはもう、これはいやし系ロボットですから、奥様を元気づけてくれますよ」

「そうだな、クリスマスだし、一つ買ってあげよう。家内の喜ぶ顔が目に見えるようだ」

ぼくはこの紳士に手渡された。

「ただ今！」

紳士が呼ぶと、家の中から奥さんが出てきた。マンションの一室。

「これ、クリスマス・プレゼントだよ」

「まあ、ありがと」

奥さんはぱっと明るい顔で、ぼくをだきあげ、「まあ、次郎ちゃん！」と呼んだ。

「次郎って名前、つけるのか？」

「だって…長男の太郎はもういないから…この子はうちの次男坊。次郎ちゃん」
「そうか。プレゼント、気に入って良かった」

この日から、ぼくとお父さん、お母さんの生活が始まった。
かべに一枚の写真がはられている。
「これはね、次郎ちゃんの亡くなったお兄ちゃん・太郎とその家族の写真なの。太郎と嫁の香ちゃん、その二人の間にいるちっちゃい女の子が、私たちの孫娘・花ちゃん。
ある日、太郎は一人で車を運転していて、交差点で信号待ちをしていたら、猛スピードで後ろからやってきた車に追突され…病院に運ばれたけれど…亡くなったの。私たちのじまんの一人息子。私たちが結婚して七年目にやっとできた子だったのに…」
お母さんはかわいそう。写真の中の女の子を見て「もう花ちゃんにもなかなか会えなくて」とつぶやく。
ぼくは太郎ちゃんや花ちゃんの身代わりなのかな？　でも、いいよ。かわいそうな人を助けるのがぼくの仕事だもん。ここはマンションなので、犬猫は飼えない。でもぼくはロボットだから、どこにでも住める。それに犬猫はダンスや歌、できないけれど、ぼくはそういうのいっぱい習ったんだ。今日はクリスマス、ぼくもジングルベル歌っておどろうかな」

ジングルベル　ジングルベル
すずがなる
きょうもたのしい　そりのあそび

「ありがと。次郎ちゃんはダンス、上手だね」
お母さんの顔に笑みがさした。

（２）
クリスマスが終わると、いよいよ年の暮れ。ぼくはお正月を待つダンスをする。

もういくつ寝るとお正月
お正月には、はねついて

おいばねついて遊びましょ
早く来い来いお正月

パチパチパチっとお母さんが拍手してくれる。すごいだろ？　タレント顔負けだろ？　ぼくは調子づいて、アユミロボット製作社で教わった創作ダンスを踊る。

悲しいときもうれしいときも
ぼくをかわいがってね
ぼくは天使の子
ワンちゃんロボットただ今 参上

ぼくは犬のようにお手をする。
「お母さん、遊ぼうよ」
「そうね、次郎ちゃん、何遊びする？」
ぼくはちょっと考えて、「せ、せ、せ、は、どう？」と提案。「小さい女の子の遊びだよ」
「ああ、あれね」
二人で遊ぶ。お母さんとぼくは、右手と右前足をトン、左手と左前足をトン、両手、両前足でトントン、歌いながらたたく。

せ、せ、せ、
夏も近づく八十八夜
野にも山にも若葉が茂り
あれに見ゆるは茶摘じゃないか
あかねだすきにつげのかさ

「次は、お手玉遊びだよ」
「お手玉がないの」
「何でもいいんだよ。小さければ」
「そう？　じゃ、これにしようか」お母さんがキャラメルの箱を出し、トントンとする。
お母さんの右手からぼくの右前足に、左手から左前足に、キャラメル箱を上にあげてとる。これも女の子の遊び。でも、花ちゃんたちは、もうこんな古い遊びはしないかな？

年の暮れだというのに、大掃除もせず、ぼくとお母さんとは遊んで暮した。心の悩みをかかえたお母さんには、ぼくみたいないやし系ロボットが必要だったんだ。

「あのなあ、事故の賠償金のことなんだが」お父さんが恐る恐るお母さんに言う。お金のことなど言うと、お母さんが怒るぞ。

「太郎の交通事故の賠償金を請求しなければならないだろ。私の勤めている会社の顧問弁護士さんが、交渉してくれるそうだ」

「賠償金！」

案の定、お母さんは怒った。

「お金をもらってどうするんです？　太郎の命とひきかえに、ですか？」

「いや、そうじゃなく」

「私はお金はいりません」

「そりゃ、お母さんはお金はいらないだろうよ。この家で働いているのは、私だからな。

だけど、香のことも考えてやれよ。一家の大黒柱だった太郎を失って、香は困っているはずだ。これから先、花を育てていかなければならないのだぞ。香たちは、今、どうしているのだろう？」

「この前、電話をかけたら、香は勤め先も決まり、花ちゃんも母子家庭ということで優先的に保育所に入れたそうです」

「勤め先ってパートか？」

「ええ」

「幼い子供をかかえて、パートで食べていけるか？　ここはがんばって正社員にならないと」

「それが難しいんですね。香は何も資格とか特技とか持っていないようですし」

「住宅ローンはどうなっている？」

「それは、借りた本人が亡くなったということで、生命保険でカバーでき、もう払わなくてもいいそうです。でも、マンションなので月々の管理費とか、また家にかかる税金とかは、払わなければならなくて、大変だそうです」

「そうだろう？　だから私は、加害者側ときちんと交渉し、賠償金ももらおうと思うんだ。

そのお金は香にあげよう。私たちの大切な孫・花を育ててくれているんだから」

「そうですか…」
「ついては、香の銀行口座番号などを知らせてもらわないと。その口座に払い込んでほしいと加害者側に伝えよう。お前、それを聞いてくれるか？」
「はい」
「お正月に香が花を連れて来てくれたときでいいが」
「えっ？　花ちゃんたち、お年始に来てくれるんですか？」
「それは来るだろう。去年もおととしも来たじゃないか」
「それは、太郎といっしょに。太郎がまだいたから」
「太郎がいなくなっても、花が私らの孫であることに、かわりはない」
「それはそうですが…」
「しかし、来ないといけないから、電話ででも伝えておきなさい」
「はい」
　お母さんは、ぼくの顔をなでなでしながら、言った。
「次郎を香と花ちゃんに見せてあげましょうね。花ちゃんが次郎に会いに、前みたいにちょくちょく遊びに来てくれるようにね」

（４）
「えっ、香ちゃんは銀行口座持っていないの？」
　電話口でお母さんがびっくりしていた。
「そりゃそうかもね。香ちゃんは高校を出るとすぐに太郎と恋愛結婚したんだもんね。太郎の通帳やキャッシュカードがあれば、お金はおろせるし、ふだんは別に困らないもんね。
　　でも、銀行口座は必要よ。近くの銀行へ行って、口座を開いてもらいなさいね。千円でも百円でも口座は作れるから。
　　今、香ちゃんは経済的に困っているの？
太郎の遺した貯金、ほんの少ししかなかったの？
　でも、交通事故の賠償金はあなたのものだから、安心していいわよ。むりに生活を切り詰めなくても、やっていけるでしょ。
　それより、私たち夫婦、さびしくてたまらないのよ。花ちゃんに会えなくて。この気持ち、わかってくれない？　私たちには、もう花ちゃんのほか、誰もいないのよ。
　あなたが忙しいのはわかるけれど、もうすぐ、お正月。お正月には花をつれ、う

ちに遊びに来てね。

それに、花ちゃんに見せたいものもあるのよ。え、それは何かって？　秘密。それは見てのお楽しみ」

そして、お母さんは、ぼくを見て、「くすっ」と笑う。

ぼくのこと、花ちゃんに見せたいんだな。見せびらかして、じまんしたいんだな、とぼくにもわかる。

（５）

一月元旦。

ぼくは、お父さん、お母さんと神社に初詣にでかけた。犬っころなら、ひもで引っぱられてとことこ走るわけだが、ぼくはロボットなので、お母さんにだっこされて行った。

「今年は良いことがありますように」お母さんはおさいせんを奮発し「ね、ね、私、さいせん箱に千円も入れたよ。だからこれからはもう悪いことがないのよ、ね」とはしゃぐ。

「去年は最悪だったからなあ」お父さんもため息をつく。「去年は、太郎、香、花といっしょに初詣に来たんだったな。ちゃんとお祈りしたのに、神様は私らから最愛の息子を奪っていった。おさいせんがたりなかったからではないだろうが」

「でも、おととしは悪いことなにもなくて、その前、さきおととしは花が生まれたのよ。良いこともあったのよねえ」

「そうか…そうだな」

「次郎ちゃん、ほら、ここにお金があるからね、これは次郎ちゃんの分として、おさいせんあげるね」

お母さんは、五百円玉を一個、箱に投げ入れる。

ぼくって五百円なの？

さて、ぼくたちはまた、神社から家に帰る。今度はぼく、お父さんにだっこしてもらった。お父さんは強いな。働きざかりの中年だ。でも、一人っ子が亡くなったので、いったい自分はこれからなんのために働いていくのか、わからなくなっているらしい。そうなると、ぼくの出番だな。

家に帰ると、お母さんは急いで郵便箱を開ける。

「あ、年賀状、一枚もない！」

「それはそうだろ。うちは喪中じゃないか」お父さんが言う。
「あ、そうだった。年末に私が喪中はがきを出したんだっけ」
おかあさんは、そそっかしい。というより、太郎ちゃんのこと、まだ納得していないらしい。

そこへ、携帯電話の音がする。
「あ、香ちゃんからメールが来てる！」
お母さんはすぐにメールを読む。

お父さん、お母さん、
あけましておめでとうございます。
私はスーパーに勤めていますので、
今日元旦にはそちらに行けません。
明日、おうかがいします。

「良かった。明日、花ちゃんたちが来てくれるだって」
「それは何よりめでたいな」
この家にも幸せがめぐってくる。
ぼくは、お正月の歌を歌っておどる。

年のはじめのためしとて
終りなき世の目出たさを
松竹立てて門ごとに
祝う今日こそ楽しけれ

（６）
来た！　花ちゃんたちが家へやってきた。
花ちゃんはかわいい着物を着ている。これは、去年の秋に、お父さんとお母さんとが七五三のお祝いとして贈った衣装だ。嫁の香ちゃんにも、もちろん両親はいるが、遠く離れたところに住んでいるのだ。ほら、ぼくは何でも知っているだろ。
「花ちゃん、ほら、これがワンちゃんロボットの次郎ちゃんよ」お母さんが紹介してくれる。「これがわが家の次男坊。太郎の弟。花ちゃんにはおじさんにあたるかな？

」
「わあっ、かわいいおじさん！」
　花ちゃんは右手でぼくのほっぺたをつつく。くすぐったいなあ。
「まあ、かわいい」と香ちゃんもにこにこして、ぼくにキスする。
「あっ、ママが笑った！　ママってパパの事故以来笑ったことなかったの」花ちゃんがおばあちゃんたちに報告する。
「そう、良かったね、次郎ちゃんのおかげだね」
　ぼくの力で、みんな、にこにこ。
「花ちゃん、遊ぼうよ」
「うん、何して遊ぶ？」
「女の子の遊び。アルプス一万尺（いちまんじゃく）」
「あ、えっ？」
「知らないの？　ほら、こうするんだよ」
　右手と右前足とをトンと合わせ、左手と左前足とをトンと合わせ、両手、両前足でトントンたたく。
　アルプス一万尺　こやりの上で
　アルペン踊（おど）りを　さあ踊りましょ
　ランララララ　ララララ　ランララララ　ララララ

　香ちゃんはにこにこしている。
「お父さん、お母さん、すみません。今まで自分の悲しみにだけ沈（しず）んで、お父さん、お母さんのこと、考（かんが）えませんでした」
「いいのよ、それで。でも、あなたのご実家は遠いんでしょ。それだったら、私たちは近くにいるんだから、いつでも私に頼（たよ）っていいのよ。
　あなたは働かなくちゃ生活していけないし、保育所も大変でしょ。花ちゃんがかぜをひいて病気（びょうき）のときは、保育所には行けないから、私が花ちゃんを預（あず）かってあげるし…それに、ふだんでも、毎日の保育所の送り迎（おくりむかえ）え、あなたが仕事で大変だったら、私がしてあげてもいいのよ。私は頼りにされると、幸せなの」
「あ、そうですか。ありがとうございます」
「他人行儀（たにんぎょうぎ）じゃなくてね、ほんと、私たちは花ちゃんがかわいいし、太郎のことをいつまでも思っていても、しかたないし。
　きのうの元旦、保育所も休みだったんじゃない？　あなたが働いている間、花ちゃんはどうしたの？」
「あの、近所（きんじょ）の人に頼（たの）んで、見てもらって」

なか　りんじん　こま

「そう？　仲の良い隣人は頼みになるわね。でも、いつもいつもじゃなくて、困ったときもあるでしょ。そういうときは、どうぞ私にお手伝いさせてね。
　花ちゃんはうちにいるときは、次郎と遊んでいればいいわ。私たちと花ちゃん、次郎をかこんで遊んでいるから、あなたはキャリアウーマンとしてがんばってね」
「そ、そんな、キャリアウーマンなんて」
　香ちゃんは、はずかしそうに笑う。
「でも、そうですね、私もがんばらなくっちゃ。いつまでも悲しんでばかりはいられませんものね」
「そりゃ、あなたはまだ若いんだから、良い縁があったら、再婚してもいいのよ。でも、今は、仕事をがんばってね」
「はい」
　香ちゃんは素直にうなずく。
　ぼくはもううれしくて、また歌を歌う。今度もアユミロボット製作社作曲家さん創作の歌。

　ワンちゃんロボット　ただ今参上
　犬型ロボット　おしゃべり大好き
　悲しい人は　みな出ておいで
　さびしい人も　みな出ておいで
　ぼくといっしょに遊ぼうよ！

「次郎ちゃん！」
　花ちゃんがぼくをだっこする。
「おじさん？」
「ううん、お兄ちゃんと呼んで」
「あ、そう、お兄ちゃん、ほんとのお兄ちゃんになれるといいね」
「うん、ぼくも人間の子供になりたいな」
「そうよね」と花ちゃんは、ぼくのほっぺたをなでなでする。
「人間の子供になったら？」
「うん、このまま寝て、明日の朝、目がさめたら、人間の子供になっていた。そうだったら最高だなあ」
「じゃ、ネンネしてごらん、花がお祈りしてあげる。天国の神様、そして天国のパパ、次郎ちゃんを人間の子供にしてね、って」
　花ちゃんがそう言うので、ぼくはもうお昼寝することにする。今度目がさめたら…わ

からないな。わかっているのは、花ちゃんたち家族が、ぼくを大切に思ってくれているってこと。それだけでも、ぼくは幸せ。夢の中でぼくはまた歌うよ。「ワンちゃんロボットただ今参上！」ってね。